

福井の地名から学ぶ防災・減災について

～ 小浜市編 ～

地象分科会 ○梅田祐一 小林孝彰 清水健 中村毅 橋本栄治 龍崎俊和 脇本幹雄

1 はじめに

大雨などの防災・減災を考えるにあたって、気象と並ぶ重要な要素として地形があげられる。

河川に近ければ、増水・越水対策、窪んだ土地であれば、浸水被害対策、山に面しているのであれば、土砂災害などの対策が必要になってくる。地形を理解することは、対策を講ずる上で、必要な知識となることは言うまでもない。そのような地形を読み解くにあたって、切り離せないものが、地名である。地名はその地域が、過去にどのような地形であったのか、どのような災害が起こり得るのかといった、災害リスクを把握するのに有用な要素だといえる。

本活動は現地調査や文献等を通して、その地形の特徴をとらえ、地名との関連について考察していく。これまでに実施してきた調査箇所と第8～9期の調査箇所を、表1および図1に示す。

表1 地名から学ぶ防災・減災の現地調査箇所

NP0 期	調査実施日	調査箇所
第3期	H27. 10. 12	福井市 東安居、社北、社西地区
第4期	H28. 10. 16	福井市 東藤島地区
第5期	H29. 10. 1	大野市 本町～糸魚町
第6期	H30. 12. 16	鯖江市 水落町他
第7期	R1. 11. 4	越前市 大滝町
第8-9期	R3. 10. 30	小浜市周辺

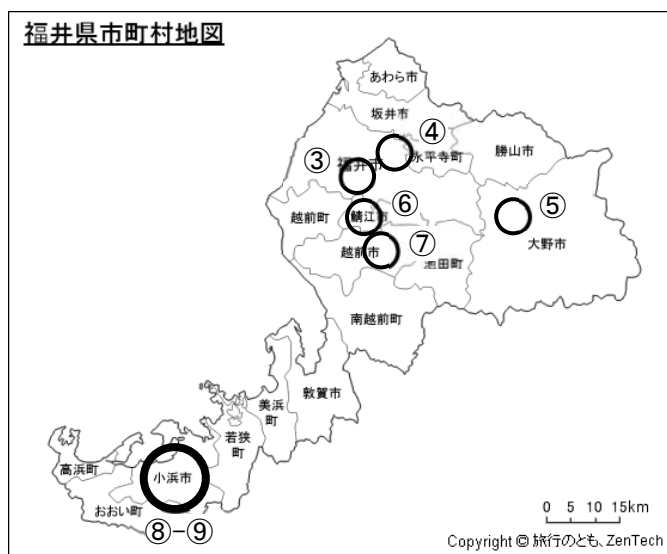


図1 現地調査箇所^[1]

2 小浜市周辺の地形地質と地名

現地調査に先立ち、水害の多発している北川周辺の地形地質と地名について調査した。

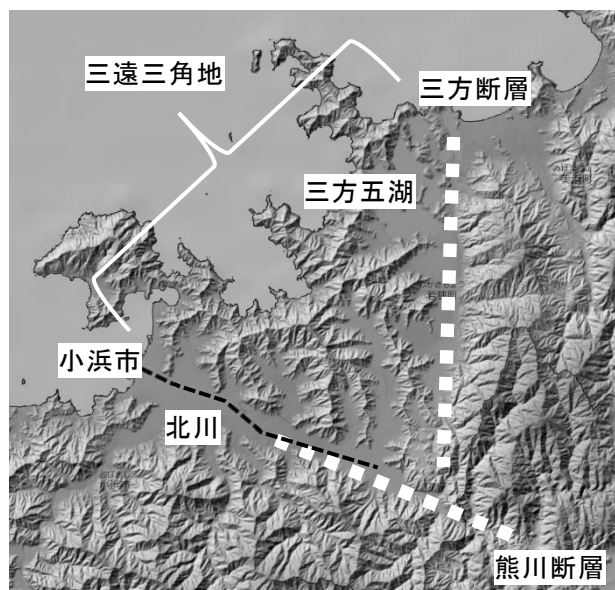


図2 小浜市周辺の地形図^[2]

小浜市は福井県嶺南地域で最も特徴的な三遠三角地と呼ばれる地形区分に位置する（図2）。三遠三角地は三方断層と熊川断層に囲ま

れた地域であり、周りに対して著しく沈降しているのが特徴である。この沈降により三方五湖ができたほか、小浜市周辺では北川の北岸側で標高の低いエリアが存在する。このエリアの周辺の地名を調べると、以下のように水にまつわる可能性のあるものが多数あり、古くから水害を受けやすい地域であったことがうかがえる（図3）。



図3 小浜市の地形図^[2]

羽賀：「はけ、がけ」で湿地や荒れ地を意味する

栗田：クリはクレ・クル(崩れる、えぐられる)

加茂：「カマ」から転じて、えぐり取られた地形や低湿地の浸水地名

新保：新たに開墾された土地を指す言葉

堤：池水を言う。堤防・土手をツツミというのは第二義であろうとのこと。

高塚：砂丘、古墳

また、三方五湖周辺でも「生倉と成出の地名は、隆起により陸化して耕地となり、(米が)いくらでもなるで、との語呂合わせ」によるというユニークな見解がある。

3 古地図の調査

「小浜市史 絵図地図編」より古地図の調査を行った。図5～7に年代の異なる3枚の地図（北川周辺）を示す。

これによれば、小浜市北川北岸側のエリアの地名は、延宝以前（1673年以前）より存在していた古い地名であることがわかる。また、図5と図6はほぼ同じ年代の地図であるが、少し古い図5では、「栗田」が「くり田」とひ

らがな表記になっていることも興味深い。これは「栗」の漢字が当て字であることを表しているように思われる。

他方、三方五湖周辺に目を転じると、上述した「生倉と成出」が図7より登場していることから、貞享二年～安永四年（1685～1775年）の間に生まれた地名であることがわかる。よって、この付近が隆起により陸化したのは、この年代であったものと推察される。

4 現地調査

現地調査に先立ち、小浜市遠敷にある若狭歴史博物館で若狭地域の歴史を調べ、その後、北川流域の現地調査を実施した。

まず北川下流域の江古川で、現在施工中の輪中堤を調査した。この周辺では平成25年の台風18号で多くの家屋浸水被害が発生したことから、治水対策として輪中堤の整備が進められている（写真1）。現在は盛土施工に先立ち軟弱地盤の改良を目的とした丸太杭打設が完了している状況であった（写真2）。土砂供給力の高い北川に対して、江古川のような小河川が合流する流域は後背湿地と呼ばれ浸水区域となりやすく、またこのような地域は泥や腐食物などの堆積により、いわゆる軟弱地盤を形成しやすいという特徴を持つ。



写真1 輪中堤計画箇所全景



写真2 丸太杭打設状況

江古川合流点付近は河道を大きく屈曲させ（写真 3）、北川と並走させたのち（写真 4）、約 1km 下流で北川と合流する。過去には江古川に水門を設ける計画もあったそうだが、現在は江古川の霞堤としての機能を維持しつつ、輪中堤などの個別対策を併用して流域治水を目指しているようである。



写真 3 江古川合流点付近の全景（霞堤①）



写真 4 北川と江古川が並走する区間の状況

次に北川上流へ向かい、高塚の小高い丘を越え太良荘地区に入った。こちらも支川流域の最下流の位置で霞堤が確認された（写真 5）。これらの霞堤①②は対岸側に山体（絶対に破堤しない山付堤）が存在するため、自然に霞堤としての地形が形成され、水門を設けないことでそれを活用しているように見受けられる（図 4）。

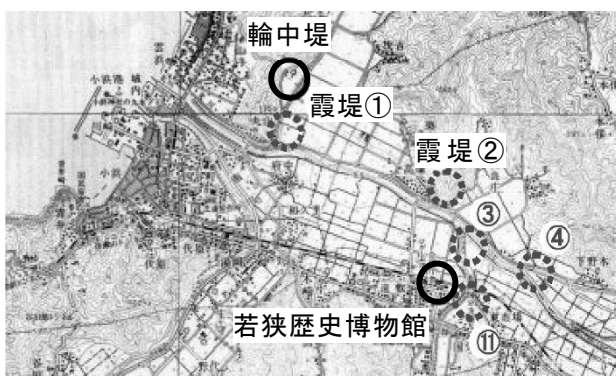


図 4 霞堤位置図 [3] より一部抜粋



写真 5 太良荘霞堤全景（霞堤②）

5 今後の活動予定

NPO 第 8～9 期の報告では小浜市の北川周辺に着目して調査を進めており、今期は現地調査を実施することができた。若狭歴史博物館では古地図や地名に関する情報も入手できたため、最終報告に向けてさらに調査を進め、防災・減災のあり方について整理、報告したいと考えている。

[参考資料・HP]

[1] 旅行のとも、ZenTech

[2] 地理院地図（電子国土 Web）

[3] 北川水系河川整備計画 (H24. 10 近畿地整)

[4] 小浜市史 絵図地図編

NPOREF 第 8～9 期地象分科会活動記録

	日程	人数	内 容
8 期 第 1 回	R2.8.1	6 名	活動方針検討
8 期 第 2 回	R3.2.22 ～2.25	6 名	メール会議
8 期 第 3 回	R3.3.18 ～5.31	6 名	メール会議
9 期 第 4 回	R3.10.30	6 名	現地調査
9 期 第 5 回	R4.2.18 ～2.28	6 名	メール会議

※ その他メールにて活動やりとり

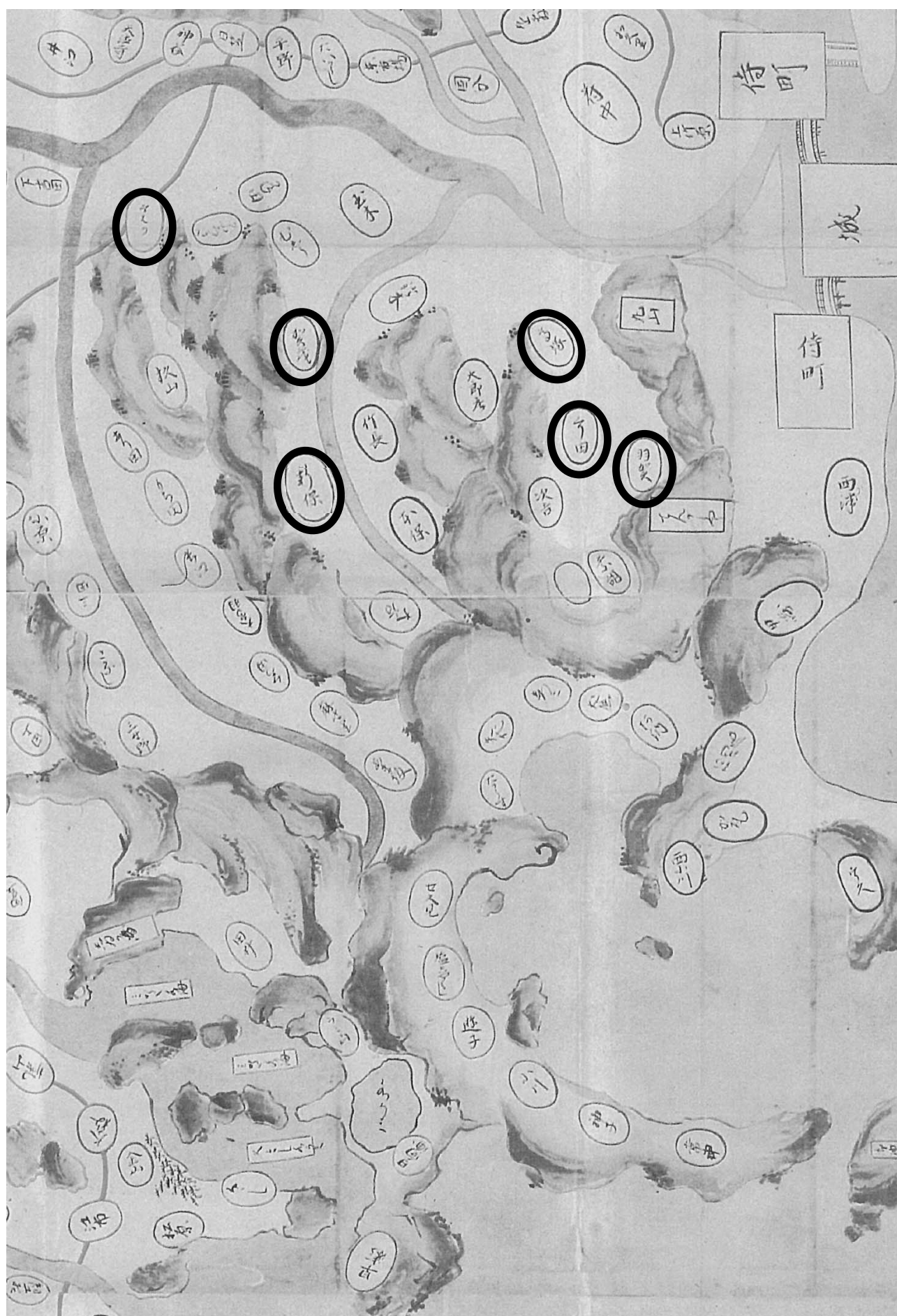


图5 延宝以前若狭国图^[4]

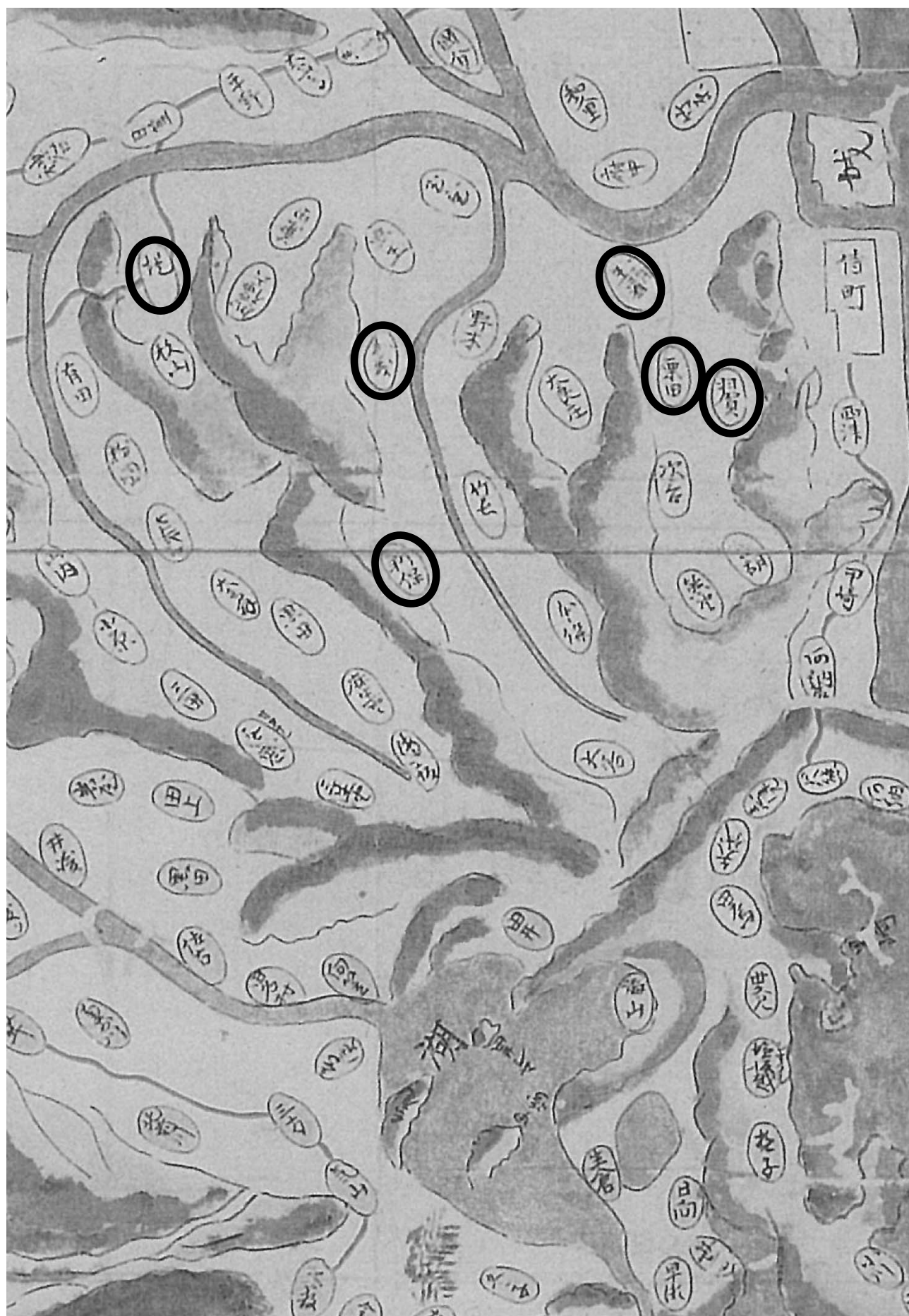


図6 貞享二年以前若狭越前御領分之図^[4]

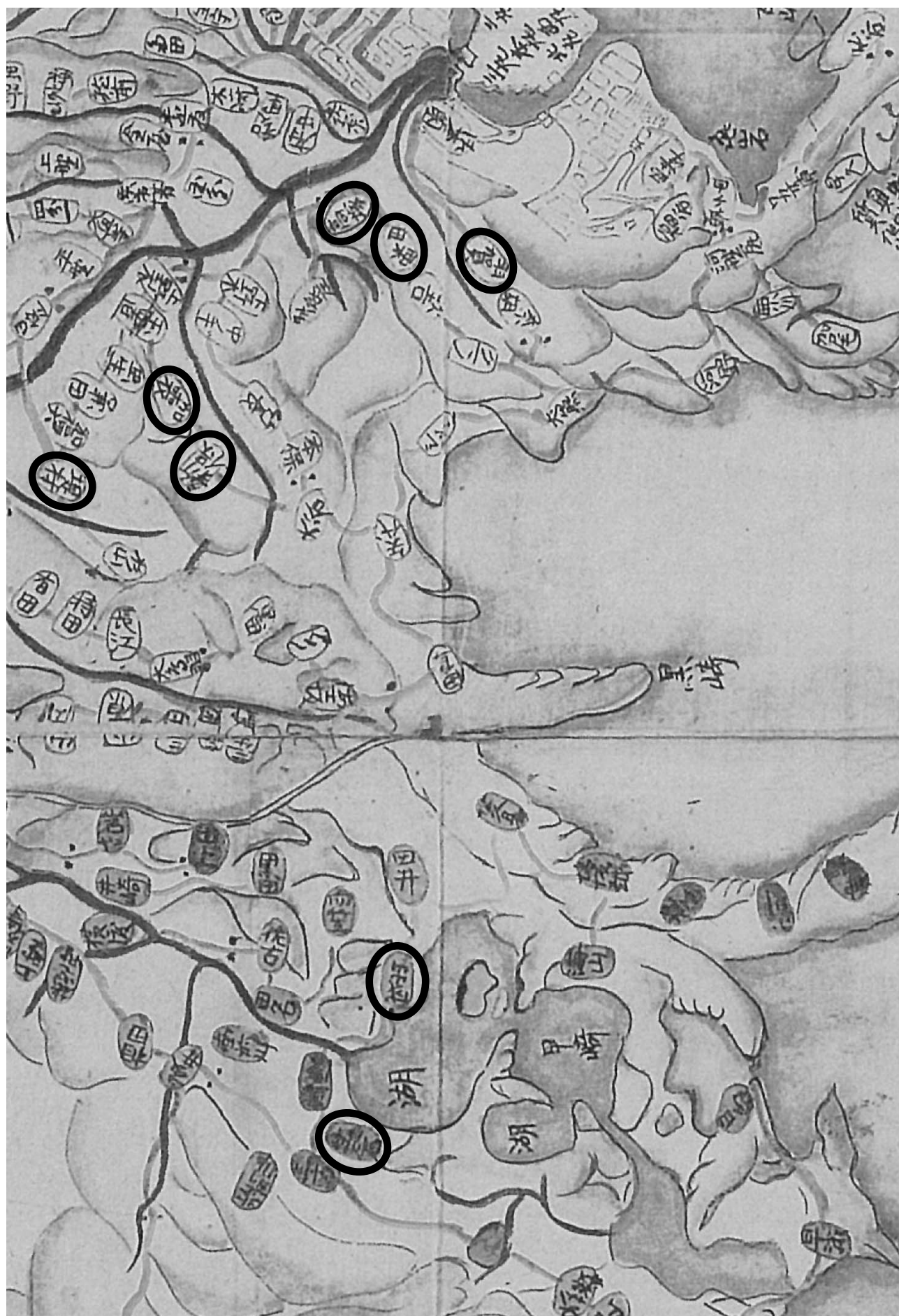


图 7 安永四年以前若狭国图^[4]